



関水由美子、二度目のステップス個展である。今回関水は、中型と小型の作品 32 点を出品した。兎にも角にも、関水の勢いは凄まじい。国内の様々なコンペに出品し、様々に受賞している。グループ展にも積極的に参加し、新しい技法を模索している。そのためではなく、画風が次々に変容していくのだ。それは無理に行っているのではなく、制作をしているとそうになってしまうのであろう。それだけ、制作意欲に漲っている。

上記の二点も、技法と主題が全く異なっている。しかし別のアーティストによる作品とは感じない。丁寧に、丹念に作品が描かれているからである。そして深く考えている。自己ができることを延ばし、できないことをできるようにと挑戦している。自己の手や絵具に、無理矢理描かせていない。無意識で描いていないにも関わらず、画面の勢いに留まることがないのだ。

アーティストには、このような時期が存在するのであろう。関水の場合は、これがまだ始まりの気がする。これから益々描き、探究を繰り返すのであろう。もしかしたらそれが関水の持ち味なのかも知れない。洪水のような制作がぱたりと止んでも問題はないであろう。無理をしている気がしない。焦っているようにも見えない。今できることを今やるといった、当たり前のごとはとても難しいが、それを関水は実践している。

御託を並べるのは、もうやめよう。純粹に関水の作品に視線を注ぐ。そこにはまるで野原のような、海原のような、青空のような生命感に満ち溢れている。画面全体を一つの華に譬えることも可能であろう。華が咲いている。我々は華が咲くとなぜ嬉しいのか。なぜ美しいと感じるのか。その根拠を問うことよりも、咲いた華を静かに見続けることのほうが重要であろう。私達は生きている。

